

偶 然 と 必 然

——自然率としての社会福祉の理解のための前提として——

田 村 米 三 郎

序

この小論における課題について筆者が疑問と関心をもちはじめたのは、今から考えれば、はるかずっと以前のことである。問題そのものの内容は、いわば哲学的領域に関するものであって、筆者の本来の専門的領域に属するものではなく、戦前戦後にわたって時々同僚や先輩諸氏とかかる論題について意見を交換したり、議論を闘かわせたこともしばしばであったけれども、特に文献的に考証して研究を進めた訳ではなく、その意味で以下の論述も全く筆者の独断的試論といって差支えないであろう。筆者の記憶では、私見について最初から即座に賛意を受けたことは皆無にしとしかかったし、又議論をつづけている中に次第に当初の否定から、徐々に、又最後には完全に同意されるに至ったようなこともないではなかったが、そのような場合は殆ど稀れであって、大抵の場合は、断片的にしか議論が出来なかったという事情もあって、どちらかといえば、議論の末物別れとなった場合の方が殆どであったようである。又その時々議論相手も必ずしもその方面の専門家ばかりではなかった関係上、論旨の正否についても未だに断定され難いものがあるように思われる。かかる未解決の問題について、しかも文献的研究を差し置いて、独断論的論述を敢てすることは、学問的には許るべきではないことも充分承知しない訳ではないが、筆者の知り得た範囲においては、かかる課題を中心とした書物や論文を不幸にして今日まで見つけ得なかったことと、数多くの議論を闘かわせた人々からもそれらについての文献につて指摘を得られなかったことから見ても、かかる論題についての

論述が未だに行なわれていないのではないかと私かに考えているような次第である。

尤も、かかる論題については、それに引きつづいて提起さるべき本質的な問題——意志自由の問題——が不可避免的に発生し、その問題についても、既に早くより、筆者は筆者なりの意見をもっている訳であるが、この小論では、前者の問題、必然と偶然に題する問題についてのみ論述し、「意志自由の問題」については又他日を期して改めて論じて見度い心算である。

尚本論において引用されているように、戦後かかる論題を主題として、津田左右吉博士著「必然・偶然・自由」なる小著が刊行されているが（昭和25年5月初版）、部分的には筆者の論述と一致しているところがない訳ではないけれども、結論的には全く異なったものであり、筆者の以下の論述の如きについては全々触れられていない。しかしながら、我々社会科学を研究する者にとっては、在来の必然偶然論では単にあきたらないというばかりではなく、研究を科学的、構造的に進めてゆくためには甚だしい不都合があり、独断論的きらいはあるが、以下の論述は必ずしも否定さるべき性質のものではなくて、むしろ従来の主観的必然偶然論に対して、客観的立場からする一つの異った領域を開くものではないかという自負すら感じているような次第である。御叱正を得られれば非常な幸甚であるとする次第である。

I. 偶 然

偶然とは一体如何なることをいうのであろうか。普通の言葉にいいかえるならば、「たまたま」だとか又場合によっては、「ひょっこり」という言葉によって表現せられる場合もあるであろう。しかしこれはあくまでも単なる言葉のいいかえであって、その内容の説明にはならないであろう。しかし言葉の中から多少の内容を推量することは出来るだろう。「たまたま或る事件が発生した」とか、「今朝ひょっこりめずらしい人に出会ったとか」いった場合の「たまたま」だとか「ひょっこり」という言葉は「偶然に」起ったとか、「偶然」に出

会ったということと同一意味内容のものと見て差支えないであろう。今具体的な一例を設けてその内容を検討して見よう。横町から走り出て来た少年が街角で自動車にぶつかって負傷したという交通事故について考えて見よう。この事件は全くの偶発事故であって、たまたま起った出来事と人はいうであろう。その意味では全く偶然の出来事であると考えられるかも知れない。しかしながらこの衝突事故が「たまたま」起ったとか、「偶然に起った」というのはどういう意味においてなのであるだろうか。果して一定の事故なり事件なりというものが、ひょっこり起ったり、たまたま起ったりすることがあるのであるだろうか。よく考えて見れば、一定の速度と方向をもって自動車が疾走しており、他方少年がそれと直角の方向へ一定の速度で走っておれば、その時間にその場所で衝突が越えることは必然である。一定の事情と一定の事情が合わされば一定の結果が出ることは火を見るように明らかである。事実、この例における衝突の場合についても、街角の屋上でこの事実を見ていた人があるとすれば、「あっ、危い」と思う暇さえないうちに事故が起ってしまった訳である。従って、成る程、突差の事故であったとしても、諸はんの事情を総合的に見れば、実は起るべくして起ったのであって、避け難い必然であるとも出来るであろう。考えて見れば、起るべき事情があったから起ったのであって、如何なる事件も起るべき事情なくして起るということはあり得ないであろう。にもかかわらずこれを偶然の事件又は偶然に起ったというのは如何なる意味においてであろうか。

又例えば、Aなる人が路上で偶然Bなる人に出合ったとしよう。この場合について見ても、果してこの出合いを偶然といい得るであろうか。Aが、しかじかの時間に、しかじかのところを歩いており、他方Bも亦、しかじかの時間に、しかじかのところを歩いていたとすれば、この出合いは必然的であり、起るべき事情によって起ったと見なければならぬであろう。起るべき事情があって起り、起るべくして起ったのものは、言葉の正しい意味において、必然又は必然的生起と呼ぶべきものであって、これを偶然又は偶然の出合いというのは如何なる意味においてであろうか。今我々は、偶発事件乃至偶然の出来事とい

うことについて一層立入った考察を加えて見よう。

凡そ一定の事象乃至事件が生じるためには、それを生ぜしむる原因がなければならぬことは論ずるまでもないであろう。或る事象乃至事件は、それを発生せしめた原因と関連づけて見られた場合、その事象は、その原因に対して結果と呼ばれるべきであろう。しかりとすれば、一切の事象乃至現象（生起）は、一定の原因によって生ぜしめられた結果であって、それを発生せしむる原因のない結果なるものは我々の考えることの出来ないものである。凡ての結果には原因があり、原因なき結果なるものはあり得ない。しかしこの場合、原因と結果との関係について二通りの場合が考えられるであろう。一つは、原因と結果との関係が極めて明白な場合であり、これこれの原因によってこれこれの結果が生じたとか、これこれの結果を生ぜしむるに至った原因はこれこれであったという風に。他の一つは、一定の結果に対するその成立原因の不明な場合である。どうしてかかる事象乃至現象が起るのかその原因の不明な場合である。このように、その原因の分明でない事柄は一々例を上げるまでもなく無数に存在するであろう。しかし、この場合大切なことは、その原因が分明でない、或いは不明であるということは、その原因が無いということではないということである。筆者が、このことについて某学者と論議した時に、その学者の主張によれば、「原因が不明であるということは原因がないということであり、少なくとも原因がないのと同じことだ」いうことであつたが、筆者はこの主張に賛同することは出来ない。尤も意味的にいえば、原因が分らないということは原因がないということと殆ど変らないと見ることも出来るであろう。しかしここでは、意味論が闘かわされているのではない。若し或る事象の原因が不明であるということと、その原因が存在しないということとが同一であつたとすれば、大部分の学問は成り立たないであろう。例えば、医学に例をとって見ても、癌その他如何なる理由でそれが発生するのか分明しない病気は数多く存在する。医学者達が必死になって研究を行なうのは、この不明な原因を明らかならしめようとするためであつて、不明なものは、無いものであるならば、如何なる努力や研

究も無用であろう。何故ならば無いものは捜し出すことが出来ないからである。分からないことは無いことではない。だから研究し、その探究に努力することが必要となるのである。

何れにせよ、原因が明、不明であるなしにかかわらず、原因のない結果なるものはなく、何らかの、或いは一切の事象乃至結果にはそれを生ぜしめる原因のないものはない。凡て起るところのものは、それを起らしむる原因によってそれが起っているのであって、この意味では、一切のものは、起るべくして起っているであって、起る理由乃至原因なくして起っているものというものはあり得ない。かく見て来れば、一切の存在乃至現象や生起は、起るべくして起っているという点において必然的であるといわなければならないであろう。起るべくして起っているものを必然的生起或いは簡単に「必然」と呼ぶ以外に呼びようはないからである。このように、一切が必然であるならば、先きの例における衝突事故や出会いも、これ又必然といわなければならないであろう。しかるに人々は普通かかる出来事を偶然乃至偶然の事件と呼んでいる。先きにも述べたように、これは如何なる意味においてであろうか。

普通に考えられることは、起るべくして起った事柄——その意味では必然的な出来事——でも、それが、かくかくの原因によって起るということを知らなかった人々にとっては、その事件乃至結果が偶然（ひょっこり）起ったように見えることである。しかし、ひょっこり（偶然）起ったように見えることと、ひょっこり起ったこととは別である。東から走って来た運転手は、北から少年が走って来ている事実は分らなかったし、北から走って来た少年は東から走って来る自動車を知らなかったという意味で、兩人にとっては、この衝突事故は偶然の出来事に見えるであろうけれども、屋上からこの事件の直前の事情を目撃していた者にとっては、正に起るべきことが起ったのであって、彼の目測に誤りがなかったように、起るようになっていたからこそ、そこに起ったのであって、必然的な事件として見られ得よう。このように、起るべくして起った事件も、その原因なり状況なりを知り尽していない者にとっては偶然のことと見えるで

あろう。例えば、同じ汽車に乗って旅行しても、目的地に着いた時に雨が降り出したとしよう。一人は到着した途端に偶然雨が降ったように思うであろうし、他の一人は汽車がかくかくの時間に到着し、その時間に雨が降ることを天気予報によって知っていたとすれば、到着する頃に雨が降ることは予め分っていた訳であり、雨がひょっこり降ったようには思わないだろう。この例によっても知られるように、或る事柄が起ることを知らない人にとってはそれが偶然に起ったように見える。或る必然的な生起について、その原因を知っているか知らないかということは全く主観的なことであつて、知っている人もあれば知らない人もある訳である。従つて若し発生原因について知らない場合を仮りに「偶然」と呼ぶとするならば、或る事柄が必然か偶然かということは人々によってそれぞれ異なるということになるであろう。知っている人にとっては必然であり、知らない人にとっては偶然ということになるであろう。これでは偶然とは「無知」ということと同じことにならう。尚且つここでは或る人にとって「必然」的なものは、他の人にとって「偶然」的なものとなり、必然とか偶然とかいうものは全く主観的なものとなり、客観的な意味において必然であるとか、客観的に偶然であるとかいうものは存在の余地がないように見える。一体「必然」とか「偶然」とかいうものをかかると主観的のものに解消してしまつて果してよいものであろうか。或る人から見れば必然的なものが、他の人から見れば偶然的であるというようなことで片付けらるべきものであろうか。一体誰が見ても客観的に必然的なものとか、客観的に偶然的なものというものは存在しないのであろうか。今仮りに、意識しているとか意識していないとか、或いは原因について知っているとか知っていないとかいうような主観的な面を一応除外して、客観的な面について考察を進める場合、先きに指摘した通り、一切の事象はそれが起る原因があつてそれが起り、起るべき原因なくして起るものがないとすれば、客観的には一切のものは起るべくして起っているといった意味において必然的であつて、「ひょっこり」とか「たまたま」とか「偶然」に起るといふようなものは全くあり得る余地がないように思われる。ここでは客観的な意味に

おける「必然」はあり得ても、客観的意味における「偶然」なるものの存在の余地はない。客観的な意味における「偶然」というものは果して全く存在し得ないのであろうか。客観的立場を貫ぬいた場合に、「必然」だけが存在して「偶然」なるものが存在しないとすれば、「必然」ということそのこと自体の意味も奇妙なものになる恐れがありはしないか。一切が必然だけしかないならば、必然という言葉自体が無意義になりはしないであろうか。しかりといて、客観的に偶然なるものは既に指摘した通り、存在の余地があり得るようにも思われぬ。矢張り偶然とは主観的なものであって、客観的なものとしては存在し得ないであろうか。

今新聞記事の切抜きを引用して、今一度偶然と必然について考えて見よう。一つの記事の主題「盗まれたおかげで飛行機事故免れる」。その本文「コロンビアの貿易商アルベルト・レストレポさんは先日、同国のペラーラの飛行場でコロンビア行の飛行機の出発をまっていた。その時一人の青年が近づいてきて、あっという間にレストレポさんがそばに置いておいたスーツケースを奪って走り出した。すぐ追跡してみたが姿はみえず、すぐすどもとの場所へ帰ってみるとすでに飛行機は出た後。じだんだふんでくやしだったが、すべて後の祭。ところが間もなくこの飛行機が途中で事故を起して乗員全員が死亡。『命の恩人』にお礼したいとレストレポさんはこのドロチャンを捜しているとか。」一体これは客観的に見て偶然の事件なのであろうか。必然の事件なのであろうか。

又別の記事は「偶然」と題して次のように書かれている。「毎週土曜日、午前9時23分東京駅発横須賀線電車で、湘南地方に住む老父を見舞う人があった。彼は用心深く、万一に備えていつも4、5両目に乗るのを常としていた。あの日もその予定だったが、たまたま翌日知人の媒酌を頼まれたので。恒例の訪問を思いとどまった。そのためあの惨事から偶然にも免れることができた」「同じ日、鎌倉に住む母親が久しぶりで東京の娘の嫁ぎ先を訪れ、夕食を共にした。夜9時近くなったので辞去しようとする、娘に玄関で『まあお茶を一杯』と勧められた。なごりのお茶に数分を費やしたため、あの電車にのり遅れて一命

をとりとめた」 「今度の事故で死亡した一知名人は、当日東京に集会があって上京し、散会後もよりの国電駅から鎌倉までの二等切符を買った。いつもは自動車で帰るか、一等に乗るかだったが、たまたま二等を買って乗合わせたのが、あの横須賀線だった。気の毒にもこの人は真正面から事故にぶつかってしまった。」 「こういう話はいくつもあるにちがいない。これを一概に『運命』といってしまうには何か抵抗を感じる。因果応報という教えが仏教にある。しかし、悪因悪果、善因善果ですべてを片づけてしまうことはできない。世の中の無数の出来事には、必ず原因と結果があると科学は教えるが、たまたまあの横須賀線に乗合わせた人は、あのような悲惨な目に会うべく運命づけられたのであるか。

上の引用文は、一寸したことによって人間の生死が変わり得るという微妙さを伝えたものであるが、その標題の「偶然」とは如何なる意味と解さるべきなのであるか。人間の生死が「ふとしたこと」で変り得るということ、3人の生死が「ひょっこり」起ったのだということを示したもののようでもあり、又それと反対に、人間の生死というものも、しかじかの原因で、しかじかの理由によってなるようにしかならないというか、凡てのことはなるようになってゆくものであって、何事によらず、「ひょっこり」起るというものはなく、起るべき事由によって起っているものであるということを示しているものようでもある。又文中・・・ラインをつけておいた「たまたま」とか「偶然に」とかいう言葉自体如何なる意味をもつものであろうか。例えば「たまたま二等を買った」という場合の「たまたま」が主観的な意味合いで、意識しないでとか原因を知らないでという意味でないことも明らかどころである。先きにも述べたように、たまたま或る人がそのことについて知らなかったとか、予期していなかったとかいうような主観的な無知を偶然というのではなしに、何人にとっても偶然であるというような客観的な意味の偶然というものを筆者は認めることが出来ない。従って客観的には、一切は必然であるというのが筆者の結論である。このことは動ごかし難い事実であり、また真理でもあるように思われる。

「偶然」に「客観的偶然」と「主観的偶然」があるというのもおかしな話で、予期しておった人々にとって必然的な事実が、予期していなかった人々にとっては偶然であるというようなことでは、或る事件なり事実なりが、偶然であるか必然であるかは各人各様であって事柄自体について、必然とか偶然とかいい得ないことになる。しかし又、何人にとっても偶然ということは、単なる言葉の遊戯であって、必然とか偶然とは主観的立場においてのみいい得るのであって、何人にとっても偶然とか、客観的に偶然というものはあり得ないのだという風にも考えられる。何れにしても、偶然というのはあくまでも主観的にのみ使用さるべきものであって、或る人にとっての偶然は他の人にとって必然であって一向に差支えのあることでもなく、矛盾することがらでもないとしても、少なくともそこには、筆者が先きに指摘した通り、「客観的偶然」なるものは存在することが出来ない。客観的には一切は「必然」でなければならない。

津田左右吉氏は序において挙げた彼の書物の中で次のように述べている。参考のためにここに引用して見よう。

「偶然を必然の反対概念だとすると、どんなことがらでも、偶然に起るということは決して無い、といわねばならぬ。自然界に於いては、一ひらの木葉の地に落ちたのも、その時そのところに、そのようなありさまで、それが落ちなくてはならなかった必然的なみちすじがある。木の位置とか、葉の枯れぐあいとか、風のむきとか、またはその他のいろいろの条件から、必然的にそうなったことであり、その条件のそれぞれがまた同じようにして、必然的に成り立って来たのである。雨が降るにしても風が吹くにしても、雷鳴にしても地震にしても、そのこと自身としては、どれもみなそれぞれ必然的にそうならなくてはならなかったのである。気温の配置、地球の内部のいろいろの運動、などが、必然的にその時その場所にそういう状態をひき起させたのである。人の生活に於いても同じであって、生まれるのも死ぬのも、笑うのも泣くのも、手を握るのもなぐりあうのも、なぐりあって勝つのも負けるのも、みなそれぞれにそうならなくてはならなかったことである。なぐりあったばあいに、そうしなくとも

よかった、またはそうしないでも別のしかたがあった、ということがあとから考えられはするが、それにもかかわらず、そのばあいには、なぐりあうと決心した、またはなぐりあう気になった、またはついなぐりあってしまった、ことには、心理的に、或は生理——心理的に、そうならなくてはならなかったのであり、そしてそうなったのは、このばあいの自分なり、あいてなり、まわりなり、のいろいろの状態とか、または人々の性格もしくは性癖とか、のためであり、それらはまた、みなそれぞれにそういう状態にならなくてはならず、そういう性格なり性癖なりをもたなくてはならなかった、みちすじがあったのである。そういう状態になったのは、その人々が出あうようになった事件とか、またはその場所とか、時とかそのほかのいろいろの事情のためであるが、それらはみなその前に起ったことからそうやって来たのであるし、人の性格性癖は、遺伝やら幼ない時からの経歴やら環境やらによって形づけられていたものだからである。クレオパトラの鼻とても、クレオパトラが特定の父母から生れたものであり、その父母のそれぞれにまた父母があり、そして同じ関係のあることがどこまでも遠く遡って考えられる限り、この女は必然的にそういう鼻をもたなくてはならなかったのである。要するに、すべてが必然的なのである。」

以上の引用文の示す限りでは、筆者の見解と全く同様であって、如何なる事象も凡て必然であって客観的意味における偶然なるものを認めておられないようである。更に同氏は次のようにも述べておられる。

「ただ人の生活に於いては、一つ一つのことからに於て時間的に継起して来たものの中には、必然的の関係がある、と考えられるにしても、同時に起った多くのことからの間の関係には、偶然であるばあいがある、といわれるかも知れぬ。或る年の日、或るところで、或ることが行なわれていた。その最中に思いがけなく地震が起った。そのために、大混乱が生じて、そのことが続けてゆかれなくなった。この地震はそのことを行なっていた人々にとっては偶然である。甲と乙とが街上で思いがけなく出あった。それから一緒に歩いた。出あったことは甲にとっても乙にとっても偶然である。そしてこれらの偶然のこと

から、思いもかけなかった事態がひき起され、するつもりでなかった行動をすることになった。偶然のことが或る事件の上、ある行動の上に、大きなはたらきをしたのである。しかしこれとて、客観的の事実として見れば、或いはあとから考えてみれば、決して偶然のことではない。その時間に地震が起ったのは、自然界の動きとして必然的なみちすじをもっていたことであり、それと同じ時に或ることが行なわれたのも、社会の動きとしては、またはそれを行なった人たちのしごととしては、必然的なみちすじによってのことであつたから、この二つがちょうど同じ時であつたのも、また必然的であつたはずである。甲が或る時刻に或る街をあるいたのは、甲としては必然的なみちすじによってのことであつたし、乙に於いても同じであつたから、二人が街止で出あつたのも、また必然的であつたといわねばならぬ」と。

上記の引用文においても、一見、別々に起つたことがらであり偶然的に見えることがらでさえよくこれを検討すれば、結局それらは凡て必然的な出来事であり、真実の意味において偶然的な事件なるものは存在しないということを中心としておられるものと見て差支えないであろう。筆者が前述せる二人の旅行者の例において示したように、汽車が目的地に到着したときに雨が降り出したのは決して偶然ではなく、全く必然的なことがらであるといったのと同様の見解と見て差支えないであろう。しかしその場合にも指摘した通り、汽車の到着の時刻を知っていたとしても、雨の降る時刻乃至雨が降るということさえ知らなかった者にとっては到着と同時に降って来た雨は全く偶然のように見えるであろう。或いは「偶然」という言葉の真実の意味は案外そういった場合のことを指すのかも知れない。上述の引用文に直ぐ引き続いて同著者が次のように述べているところより見ても或いはそうなのかも知れない。「しかし大切なのは、地震は人にとっては予期せられなかつたことであり、甲と乙とが出あつたのもまた互に予期しなかつたことである、という点である。そうしてこの予期しなかつたことの起つたのが、その人にとっては偶然なのである。あとで考えてみれば、或いは客観的の事実として見れば、必然的なことであつたが、その時に

於ては、また主観的には、それは偶然であったのである。そこで偶然が歴史を動かす、人の生活を動かす、といい得られる」と。津田氏の意見によれば、客観的に必然的なものでも、主観的には偶然である。それが偶然であるというのは、予期しなかったとか予期し得なかったということである。そして或る事柄について予期したかしなかったかということは全く主観的なことがらであって、或る人に必然的な事柄も他の人には偶然的であるということになる。この意味で同氏も亦、「客観的な偶然」なるものを認めないことになる。

岩波哲学小辞典の「偶然」の項には次のように記るされている。「偶然とは吾人が因果律により予知し得なかった事件の生起をいう。偶然は或る事件が法則に支配せられず原因を有しないということの意味するのではなく、むしろ吾人の知識の不十分を意味する。」この辞書の教えるところによれば、或る事象の発生が偶然であるのは、その事象が起る原因なくして起ったということではなくして、それが起る原因を何人も知り得なかったという意味においてその発生は偶然なのであるという訳である。この見解によれば、人癌や風邪は偶然に発生するということになる。何となれば、今日の医学の段階では未だに癌や風邪の発生原因や成立機縁が明らかでないからである。筆者も敢てこの説に反論を加えるつもりはないが、一定の原因を以て発生する癌が、単に未だ人間がその発成原因を理解していないからといって癌は偶然に発生するとか、癌の発生は偶然であるというのも少々奇妙な感じを受けない訳にはゆかないような気がするけれども、この説を応用すれば、大抵の人が知っているものをたまたま或る人がその原因を知らなかったために予期せぬ事件が起ったとしても、それは主観的な偶然であって、真の偶然とはいいい難く、何人も予知し得ないような事件の発生のみが客観的偶然であって、この客観的偶然こそ真の偶然であるということになり、ここに始めて「客観的偶然」といったものが存在し得ることとなる。

Ⅱ. 必 然

(I) に於て見られた如く、津田氏と辞書とでは「偶然」ということについては全く同じような考え方であるように見える。津田氏によれば、客観的には必然的な事件も、それが当事者によってか人によって予期せられなかったという点では偶然の事件であるという。他方辞書では、起るべき原因があつて起つた事柄でも、それが人間の予知し得ない又は予知し得なかつた事件を偶然であるとするからである。ここで一寸気になることは、津田氏の場合、上に示したように、或る事件が必然であると同時に偶然であり得るということである。同一事件が必然であると同時に偶然であるということである。一体かかることが如何にして可能なのであろうか。それは必然と偶然というものを対立物として認識されているとはいうものの、氏が或る事柄が必然であるというときには、事柄自体の成立の仕方そのものについていわれており、氏が偶然であると指摘されるときには、事柄自体の成立そのものについてではなく、成立したものと人間の意識との関係として捉えられているからである。一つの事態が如何にして発生したかということと、その発生した事柄を或る人が予期していたか否かということとは全く別個の事柄である。つまり氏においては必然という場合と偶然という場合とでは視点を異とにされている訳である。従つて或る視点（客観的立場）からして必然的なものでも、異つた視点（主観的立場）からすれば偶然的であり得る訳である。必然とか偶然とかを分類するためには同一視点からなされなければならない筈であつて、凡そ分類の仕方というものはそうあるべきものでなければならない。同一視点から論理的に区別されているならば、例えばA、B、という風に対立概念として明らかにせられているならば、或る事柄はAでなければ、Bでなければならず、それがAであると同時にBでもあるということは明らかに矛盾である。この点辞書の教える方が正しいのであつて、辞書の場合には、事柄の成立そのものについて必然偶然が云々されているのではなくて、成立した事実が人間にとって予知されていたか否か、又予知され得たか否かという、事態と人間の意識なり知識なりとの関係から必然と偶然とを区別しようとするものであつて、これこそ正に分類の正しい仕方であるとい

得るであろう。従ってこの説を採用する限りでは、起るべくして起ったものでも、予知し得なかったものは偶然であり、予知したり予知し得るものは必然ということになる。従って偶然はあくまでも偶然であって必然たり得ないし、又一定の事実が必然であると同時に偶然であるということはありません。

ここで容易に気づくことは、必然とか偶然とかいう場合に、A. 発生した事柄そのもの或いは事柄の発生仕方そのものについていわれる場合と、B. 発生した事柄と人間の意識や知識との関係に着眼していわれる場合との二通りのあることである。前者(A)の場合を仮りに客観的立場における認識といわれ得るとすれば、後者(B)は主観的立場からする認識と違って差支えないように思う。何となれば、前者は人間が予知するとせんとにかかわらず、人間の知識や予見から独立して事態の成立そのものについて論ぜられている訳であり、後者は何からの原因によって成立した事態を人間が如何に意識するかというように、事態そのものを人間の予知又は予期ということとかわらしめて考えられているからである。後者(B)におけるが如き仕方で必然と偶然を区別せんとするならば、一定の事態も人間の認識力の発展や科学の進歩発達につれて、昨日偶然であった事件も今日では必然となり、又今日偶然と断定される事態も明日は必然ということになり得るであろう。筆者だけかも知れないが何かはっきりしない、たよりない感じをぬぐう訳にはゆかないような気がする。人知や科学の進歩によって影響を受けることなく、又人が予期するか予期しないとかというような主観的な話しではなしに、本当に「客観的な偶然」なるものは存在し得ないのであるか。

既に十分に論述し来たように、起るべくして起るものを「客観的必然」とするならば、何事も起る理由なくして起るものはなく、このことは原因のない結果を認めない限りは絶対に不可能と違って差支えないであろう。しかし、客観的に考えた場合、一切は客観的必然であり、客観的偶然などあり得ないとするならば、客観的必然乃至客観的意味における必然などというのもおかしいもので、偶然のない必然を認めることになり、それならばむしろ、一切は必然な

どといわないで、凡ての事柄は原因があって起るのだとか、原因のない結果などは存在しないのだといった方がましであろう。原因のあることを「必然」というのでは言葉のナンセンスとなろう。

筆者が問題としたいのはこの点である。筆者にはやはり「客観的偶然」なるものが存在するように思われる。この客観的偶然というのは、¹勿論人間の意識や知識と関係なく、又人間がその発生を予期していたとか予知し得なかったというような主観的な話ではなしに、全く客観的に事態の発生そのものについて考えて見て、「客観的な偶然」、「客観的に偶然的に発生する事件」なるものが存在するということである。いわば、従来の一恐らくはこれが通説であるように思われるが——主観的立場からする偶然論に対する、客観的立場からする新しい偶然論の分野があるように思われる。以下に筆者の見解を明らかにして見よう。

やや話がそれるようではあるが、恐慌（経済恐慌）については二つの対立する学説がある。所謂偶然論的恐慌論と必然論的恐慌論とである。経済生活の急激な攪乱としての恐慌の発生についての理論であるが、今日では後者の必然論的恐慌論が有力である。恐慌論の教えるところによれば、恐慌には二つの型があるという。いわば、古代・中世型恐慌と近代型恐慌（近代資本制恐慌）とである。名称の通り、前者に主として古代、中世において多く発生を見たものであり、後者は近代資本制社会において発生する恐慌である。その恐慌の発生原因についていえば、前者は主として自然的、政治的原因によって発生し、後者は経済的原因によって発生する。自然的政治的原因とは例えば、戦争、内乱、地震、暴風雨、かんばつ等の天災地変によって起るものであって、これに対して純経済的原因というものの内容については、これこそ正に恐慌論の主要な内容であってここで一言でいい現わせないものである。尚お発生部面についていえば、前者は生産部面から起るのに対して、後者は流通部面から発生する。又生産物についていえば、前者は自然的災害などによる物資（生産物）不足という形をとって現われるのに対し、後者は生産物過剰という形態をもって現われ

る。即ち、前者は過少生産恐慌であるに対し、後者は過剰生産恐慌である。この過剰生産恐慌こそ近代恐慌の本質的な特長である。従って生産物価格乃至物価という点から見れば、後者は物資不足による物価騰貴乃至高物価として現われるが、後者は生産物過剰による物価暴落乃至低物価、恐慌という形をもって発生する。又発生領域について見ても、前者の自然的、政治的異変によって起るところのものは、部分的局部的のものであるが、後者は全体的、全面的であり一國全体に波及するどころか、今日では国際的規模において発現し、世界の一角に起った恐慌はいっしゅんにして全世界に波及する。恐るべきは正に後者の近代型恐慌である。しかも前者の発生は散発的、臨時的であるが、後者の恐慌は定期的、周期的に襲来発生する。前者の発生が偶然的であり後者の発生は必然的といわれる所以である。我々経済学者の研究対象とする恐慌は正に後者の近代資本制経済恐慌である。尚お古代・中世恐慌は古代、中世に発生し近代社会には発生しないというものではない。近代資本制社会においても、天災地変によって古代中世型恐慌が起り得ることはいうまでもない。あくまでもそれは、古代・中世型というように、型であって、古代・中世に起った恐慌を古代・中世恐慌といい、近代になって起る恐慌のすべてを近代恐慌と呼ぶのではない。近代恐慌とは、近代資本制生産社会に特有な、その意味では近代資本制社会に固有の経済構造乃至経済機構から、その内在的必然性として発生する恐慌のことである。ここに必然論的恐慌論の意義がある。資本制社会においては、恐慌（近代恐慌）は必然的であるという。既に論述しきったところによって明らかのように、一切が客観的には必然であるにもかかわらず、「恐慌は必然である」というのはおかしい話である。しかし、恐慌（勿論近代恐慌の意味）は資本主義社会という社会構造そのものの中から、好むと好まざるとにかかわらず不可避免的に発生するという意味であって、その意味においては資本制生産方法をとらない社会では起り得ないものであり、同時に資本制社会では避けることが出来ないという意味において「必然」であるということである。これに反して、古代・中世型恐慌は、仮令資本制社会においても、先きに指摘した通り、天変

地異によっては発生することがあるが、しかしそれは、資本主義社会であるから、天災地変が起った訳ではない。天災地変は、封建制社会であれ、資本主義社会であれ、はた又社会主義社会であれ、起るべきときには起る訳であるから、かかる型の恐慌は資本主義だから起るといふ訳ではない。従って、資本主義経済構造を分析研究する経済学の立場からすれば、かかる古代・中世的恐慌が、客観的には起るべき原因があつて起つたとしても、それは、資本主義社会という点から見れば偶然的な恐慌である。これに反して、近代恐慌は資本制社会が資本制社会であるという構造そのものの中から、構造そのものの必然として発生するのであるから、一般的には（客観的には）、同じく起るべき原因があつたものであるという点では前者と同一であるとしても、後者の場合は言葉の正しい意味において「必然的」である。要するに、資本制社会という点からいへば、その発生を人間が主観的に予期すると予期しなにかかわらず、前者の恐慌の発生は「偶然的」であり、後者のそれは「必然的」である。つまり後者は資本制社会に内在的に必然的なのである。

今失業というものを例にとつても同じことがいふ得る訳である。失業とは何かということも仲々容易な問題ではない訳であるが、職に就いていた者が離職乃至失職した場合は勿論失業といわれねばならないけれども、学校を出て未だ一度も職につき得ないものも失業であり、又能力に見合わない職についている場合でも正しい意味で失業であるにもかかわらず、大学を出てそれにふさわしい職がないために例えば門衛をしているとか、職がないために帰村してやむを得ず父や兄の野良仕事を手伝っているとか、又失職した女性が職を見付ける間は親の家事を手伝っている場合にも、我が国の統計では凡て職業従事者と見なされ、第1の場合は、例えば工場勤務者、第2の場合は農業従事者、第3の場合は家事従事者とされているが如くである。このような潜在失業や半失業も事実的には厳格な意味における失業である。しかし、病気だとか、身体障害のために職に就き得ないで仕事に従事していない者は正しい意味の失業者ではない。経済学でいう失業とは、働く意思と働く能力があるにもかかわらず働く口がな

いというのが本来の失業である。働けない者が働いておらないのは当り前の話であって失業しているのではない。学問的用語でいうならば「不本意失業」——働く意思と能力がありながら働くことの出来ないもの——即ち「資本主義失業」を普通に失業と呼ぶのである。強制乃至半強制の奴隷制社会や封建制(農奴制)社会や、原理的に労働が強制せられている社会主義社会や共産主義社会には、かかる意味の不本意失業なるものはあり得ないものである。かかる失業は資本主義社会にのみ存在し得るものであるばかりではなく、資本主義社会では避けることの出来ない必然性として発生する。この意味で失業は資本制社会に内在的に「必然的」なものである。しかし、先例の如き病気や身体の障害のための失業は、資本制社会機構そのものから起るのではなく、古代・中世社会や社会主義社会においても起り得るものであって、かかる失業が資本制社会において発生したとしても、それは近代資本制社会にとってみれば「偶然的」な失業といわなければならない。それは必ずしもその発生が人間にとって予期しないとか予知し得ないというような主観的意味の偶然ではなく、前近代恐慌と同じように資本制社会にとっては客観的に偶然的なのである。

最後に女性を例にとって考えるならば、或る女性が交通事故によって外傷のために出血した場合と、その女性が女性としての生理的構造よりする生理的出血とを比較した場合に、前者の外傷による出血はその女性にとっては偶然的な出血であるが、後者の生理的出血は、それは彼女が女性であるというそのことの内在的必然として、彼女が女性であるというそのことに基づいての出血であるという点において、この出血は彼女にとって必然的であるといわなければならない。従って、彼女にとっては、前者の出血は「偶然」であり、後者のそれは「必然」であるといわなければならない。このことも先きの例におけると同様に、予知し得るとか予期しなかつたということとは全く別の事柄である。仮令彼女が予定通りに胃の手術によって出血したとしても、この手術による出血は先きの外傷による出血と同じように、女性という立場から見れば、これは、やはり、客観的に偶然的な出血といわなければならない。

以上要するに、一切のものは客観的には起るべくして起り、「ひょっこり」又は「たまたま」起るといふが如きものはあり得ないという意味では、一切のものは客観的には必然的である。しかしながら、同じく必然とはいっても、一定の枠を設定して、枠そのものの中から内在的に必然的なものと、同じく起るべくして起ったとしても、いわば枠の外から、枠とは無関係の形で外在的に必然的なものがある訳である。今この内在的必然を「必然」と名づけ、外在的に必然的なものを「偶然」と名づけるならば、我々は人間の意識や主観や予見や予知といったものから独立して、本当に事態そのものの成立乃至発生に即して「客観的に必然」的なものと「客観的に偶然」的なものとを客体的に区別することが出来るであろう。かかる視点からする「必然」と「偶然」の区別こそ、在来の視点よりも一層科学的研究を行なう場合には必要でもあり、有用でもあると考える次第であるが、いかがなものであろうか。